

第二節 服裝と風采

纏頭回

纏頭回は「アリヤン」人種なるも、現今は殆んど清國人に類化せり。然りと雖も其の特徴は、尙ほ全く消滅せずして、男子は鬚髯共に密且つ美に、眉目の間自ら白皙人種の骨相に酷似する所ありて、女子は殊に然りとす。

男子は剃髮圓頭と爲り。女子は二條或は數條に辮髮して、之を前後に垂下す。其の辮髮の二條なるは有夫の婦にて、數條なるは未婚の女なり。頭上には男女共に土耳其帽(頂上の尖りたるもの)にて「チペテールカ」と稱するものを冠す。男子は尙ほ其の下に椀形の「チャルマ」と稱するものを冠す。其の帽は天鷲絨又は布を以て製し、男子は多く黒色、女子は紅色、綠色のものを愛用し、共に諸種の花紋を刺繡して、外見甚だ美麗なり。又女子の帽は、金欄、銀欄を以て製したるもの少なからず。

男子讀經する時は、必らず帽を被り、其の上に白布を纏卷し、是を「ダスタル」と稱す。即ち印度式の「タバールン」と同一なり。回々教の僧侶、所謂阿渾アホン又は、老人は日常絶えず之を用ゆ。此の種族を纏頭回と名けたるは全く是に因る。

纏頭の名
を得たる
所以